

# 『今が、歴史を創る時』 個々人がつむじ風を起こそう

## 第8回 Noble·Savage(ノーブル·サベッジ、崇高なる野蛮人)

(毎月掲載)

永田 隆一

三島由紀夫が、「我々にとっての「サムライ」は、われわれの祖父の姿であるが、西洋人にとっては、いわゆるノーブル・サベッジ(高貴なる野蛮人)のイメージでもあろう。われわれはもっと野蛮人であることを誇りにすべきである」と書いています。また、そのためには「男は、危機にそなえて、毎日毎日の日常生活を律していくという根本的な生活に戻ることである」と。

最近のマスコミは、「失われた20年」という表現を多用します。しかし、それ以前の約140年前の明治維新から、120年続いた波乱万丈の歴史の根底に、当時のリーダーたちの行動にはノーブル・サベッジが観て取れます。高い志を掲げ、蛮勇を奮い、結果を出してきた。もちろん歴史が「あれは間違いだった」と総括した事例も数多くございます。

かたや、昨今の韓国、台湾、中国の産業界や政治において、ノーブル・サベッジを感じるが増えてきております。蛮勇をふるう肉食系のアジア各国と、教科書的な行動に終始する草食系の日本と対比することができるともかもしれません。

### 《もう一度、野蛮人の気質で》

このままでは、まずわが国は、衰退の一途をたどるしかないという大きな危機感を禁じえません。

現在の政治のリーダーシップには、期待を持つことができません。期待しても詮無いことであります。ゆえに『我々個々人が、野蛮人の気質に立ち返る』ことが必要かと考えます。

1. 崇高な立場からの発想
2. コンプライアンスは死守
3. そんな大胆な…と思われる蛮勇を奮ったスケールの大きな戦略を策定  
蛮勇を奮った戦略の一例です。

1. 企業が、やる気のある若手社員を0.5%選抜して、未開拓の海外へ3年駐在させて3年後のビジネス拠点の準備をさせる。
2. 企業が優秀な高校生を採用し、社員として企業の指定の大学へ留学させるスキームを構築
3. 低収入のフリーターや外国人労働者を大量に思い切って契約社員で採用して、日本国内の製造業のコスト競争力を高める
4. 大企業が保有する「塩漬けになっている特許」を中小企業へ無償で供与して、その事業化を支援する
5. 大手企業がスポンサーとなり、就職できないポストドク(博士号を取得後約5年研究者生活を送っている約2万人)を採用する企業を創設して、企業の知的財産部門へ

派遣して、知財戦略を強化する(比較的ポストドクは、知財能力に長けているため)

### 《練習するほど運が味方する》

南アフリカ出身のゴルファー、ゲーリー・プレーヤーの言葉に「練習すればするほど、運は味方してくれる」というのがあります。蛮勇を奮ったスキームの中で、練習漬けになるのも一興でありましょう。その練習のなかから、大きな可能性が生まれてきた時に、計画を作成するほうが結果的にうまくいくのではないかと考えます。

### 《ばかばかしい実験・練習》

進化論の提言者であるチャールズ・ダーウィンの言葉には「私はばかばかしい実験が大好きで、いつでもそれをやっています」という言葉があります。ばかばかしいを蛮勇と言い換えることもできるでしょう。

欧米の特許は、基本特許に重きを置き、日本の場合は、改良・応用特許が多いと言われています。基本特許は、蛮勇特許・ばかばかしい発想の特許であります。

企業活動では、継続した日々の努力が重要です。しかし、今は危機的状況であります。崇高なる野蛮人に戻ることも必要であります。

(毎月掲載)